

報 告

第60回粘土科学討論会（福岡大会）

伊藤健一*・上原誠一郎**・桑原義博***・武内浩一****・和田信一郎*****

*宮崎大学国際連携センター

〒889-2102 宮崎県宮崎市学園木花台西1-1

**九州大学大学院理学研究院

〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744

***九州大学大学院比較社会文化研究院

〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744

****長崎県窯業技術センター

〒859-3726 長崎県東彼杵郡波佐見町稗木場郷605-2

*****九州大学大学院農学研究院

〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-10-1

第60回粘土科学討論会（福岡大会）は、平成28年9月15日から9月17日の3日間、九州大学の病院キャンパス（福岡市東区）内の同窓会館と百年記念講堂を講演会場として行われた。福岡大会実行委員会は、当初九州大学の新キャンパス（伊都キャンパス）での実施を計画していたが、空港、駅ならびに福岡市都心部からの交通の便が必ずしも良くないことから、福岡市営地下鉄の駅に近接した病院キャンパスでの開催に変更された。

今回の討論会は第60回目であり、日本粘土学会としては1つの節目となることから、いくつかの点で開催上の工夫をした。まず、従来の討論会では、参加・講演申し込みは電子メール、粘土科学誌に綴じ込みの申込用紙のファックス送信や郵送などによっていたが、今回はインターネット経由での申し込みに一本化した。学会のホームページの申込ボタンをクリックすると参加登録フォームが開き、そこに必要情報を入力してもらうことにした。この方による申し込みが難しい方については、何らかの方法で連絡をしてもらい、事情によって個別に対応することとしたが、結果としては、インターネット経由以外での申し込みはなかった。次に、初日のシンポジウムは「60周年記念シンポジウム」とし、日本における粘土科学の到達点と将来を、アカデミックな面と産業利用の両面から俯瞰できるような構成にした。また、参加者全員に、日本粘土学会のロゴマークの焼き印が押された檜の櫛を記念品として配布した。

今回の討論会においては、記念シンポジウム9件、口頭発表51件（うち9件は提案型セッション）、ポスター発表35件、合計95件の講演が行われた。討論会への参加登録者数は合計156名であり、内訳は正会員99名、名誉会員2名、シニア会員1名、共催学会員17名、学生会員19名、一般非会員8名、学生非会員10名であった。

討論会初日は、同窓会館玄関ホールにおいて8時半から受付を開始し、9時30分から、同窓会間小講堂と百年講堂中ホール3において一般講演が行われた。口頭発表



B会場における研究発表

では、59回討論会と同様に、講演者が各自のPCをプロジェクターに接続するというやり方を採用した。ただし今回は演者の交代をよりスムーズにするためプロジェクター切替機を利用した。PCとプロジェクターの相性によるトラブルを心配したが、投影画面の色が不自然になるというトラブル1件以外には何らトラブルはなかった。

11時30分からは、同窓会館小講堂において、黒田一幸会長を議長として総会が行われた。一般社団法人化して最初の総会であり、会場入り口では出席者数を正確に把握するため、討論会参加者の名簿を用いたチェックが行われた。総会では全ての議案が提案通りに採決され、八田珠郎会員を会長とする新しい体制が発足した。

総会終了後各賞の授賞式が行われ、黒田一幸会長から賞状と記念品が手渡された。平成28年度の各賞の受賞者は次の通りであった。学会賞：山崎淳司会員、奨励賞：三好陽子会員、技術賞：クニミネ工業株式会社、論文賞：J. T. Klopogge氏・B. J. Woo氏、およびY. Date氏、Y. Kagawa氏・R. Sasai氏・K. Kohno氏・E. Hino氏・T. Fujii氏、K. Aoki氏、K. Oda氏、学術振興基金賞：石橋

光会員，工藤奈々会員，村松佳祐会員，鈴木駿平会員，仁科 遥会員。

13時30分からは60周年記念シンポジウムが開催された。シンポジウムは2部構成で，第1部は，産業界に繋ぐ粘土新技術，と題し，中戸晃之会員による「粘土コロイドの液晶性と外場による制御」，宮本展義会員による「液晶性粘土コロイドを利用した新しい粘土／ポリマー複合体の合成」，蛭名武雄会員による「無機と有機の良いところ取りをする粘土含有複合材設計」，鈴木正哉会員による「低温再生可能な省エネ用粘土系吸着材の開発」の4件の講演が行われた。第2部は，粘土の社会への貢献と題し，黒田一幸会員による「新材料創製に向けたケイ酸塩の役割」，小暮敏博会員による「粘土鉱物の構造—この20年でわかったこと，そしてこれから明らかにすべきこと—」，南條正巳会員による「土壌・肥料・農林業における粘土および無機物の役割」，佐藤務会員による「“Claysphere: past, present and future” の再考」，山岸皓彦名誉会員による「粘土カラムを用いた光学異性体の分離技術：きっかけ，発展そして現状」の5件の講演が行われた。

シンポジウム終了後，講演会場最寄りの，福岡リーセントホテルにおいて懇親会が行われた。参加者は，当日申込を含め合計102名（うち2名は実行委員会招待）であった。伊藤健一実行委員の司会のもとで進行した。開会に際し，招待者2名に祝辞をいただいた。日本鉱物科学会会長の小山内康人九州大学大学院比較社会文化研究院長には，九州大学の新しいキャンパス計画の紹介と60周年を迎えた日本粘土学会への祝辞をいただいた。日本粘土学会の設立当時をご存じでカオリン鉱物のインターカレーションの発見により現在の粘土材料科学の礎の一つを築かれた第13代日本粘土学会会長で学士院会員でもある九州大学名誉教授の和田光史名誉会員には，粘土科学第1巻第1号を掲げながら，粘土学会創設当時の雰囲気や，今後の粘土科学への期待などについてお話いただいた。

その後，第60回大会開催を記念して，粘土科学研究の

今後の発展を祈念して鏡割りが行われた。両来賓に加え，第32代日本粘土学会会長に就任した千葉科学大学の八田珠朗新会長と同日にお役目を退任された黒田一幸第31代日本粘土学会会長が木槌によって，福岡の銘酒萬代の樽を割り，八田会長の乾杯をもって懇親の場が開かれた。酒は記念品として配布された檜の椀に入れて参加者にふるまわれた。しばしの懇談ののち，翌日の提案型セッション2件の紹介，山口大学鈴木康孝会長による若手の会の紹介に続いて，同日総会で論文賞など各賞を受賞された方々の紹介を行った。その後，九州大学の和田信一郎大会実行委員長が開催状況の報告を行った後，次回第61回大会について，富山大学の丸茂克美次期大会委員長より開催の案内をいただいた。最後に，黒田一幸前会長に閉会の挨拶をいただき，盛会のうちに懇親会は閉会となった。

討論会2日目，9時から12時まで，2会場で一般講演が行われた。昼食をはさんで13時から14時30分まで，百年講堂中ホール1・2においてポスター発表が行われ，14時30分から17時まで，同窓会館小講堂と百年講堂中ホール3の2会場で提案型セッションの講演が行われた。提案型セッションのテーマは，鈴木正哉会員と山田裕久会員の提案による「福島汚染土壌の減容・資源化」，および宮元展義会員提案による「粘土鉱物を利用したナノ機能材料の新展開」であり，それぞれ5講演，4講演が行われた。

3日目には見学会が開催された。参加者は25名で，8時30分に討論会会場の百年講堂前に集合した。中型バスで九州道から長崎道を経て佐賀県武雄市までひた走り，10時過ぎに最初の見学地「旧パーライト（真珠岩）採掘場」に到着した。現在は，ベンチカットした採掘跡をそのまま利用して，陶芸家のアトリエ兼カフェテリアとなっている。景観全体がデザインされているのでハンマーは使えないが，落ちている石は持ち帰っていいと許可が出ていたので，参加者は気に入ったサンプルを拾って持ち帰ることができた。

次の見学地，有田町の「泉山磁石場」では，磁石場組



和田光史名誉会員祝辞



見学会（泉山陶石の採掘場内）



見学会(広瀬山陶石の採掘場)

合の田代氏と陶芸家の西原氏に案内と説明をしていただいた。田代氏からは李参平による泉山陶石の発見とその後の有田の発展の歴史が、西原氏からは泉山陶石を使っ

た磁器製造の難しさ、最近発見された「ぎち土(セリサイト粘土)」の利用方法について説明をしていただいた。採掘場内では泉山陶石とセリサイト脈を見学した。西原氏から「ぎち土」サンプル提供の申し出があり、国立科学博物館に寄贈されることになった。

佐賀県立九州陶磁文化館で昼食の後、有田焼創業400年を記念して開催中の「人間国宝と三右衛門」展を観覧し、有田焼の至宝を堪能した。

午後からは広瀬山地区の流紋岩と陶石を見学した。岩尾磁器工業が採掘していた流紋岩の採石所では、名称どおりのマグマが流れたような紋様や、破碎された同質岩片を礫として包含している産状を観察することができた。また、有田町指定の史跡「竜門磁石場跡」では手掘りの採掘跡を見学して、古の陶工達のやきもの造りへの情熱を感じることができた。

最後に有田焼卸団地でお土産を調達し、JR有田駅、福岡空港、JR博多駅でバスを降り、それぞれの家路へと向かった。